






森て茲福てよまて致令逢
祇翁る事至るあし心宛を
つゝし若事誠我まて拙るは
一其を儲て傳説小て像子小
ゆけまぬるは傳説之津名君古
室小及てさし如も其る也一紙

納るるにぬるるぬるるに家
今とて一旬ふ一年とて以法蓮を
いふちむじふ中年あまふとて日乃花
十花空のりしにさし如尊一

て保身印 辨其月
若人書 

像前鉢踏服起百韻

初時雨猿も小蓑を添ゆけり 公羽

作空の底葉成るのふせは波も也	若人
風流の成るは流くせに任れま	観祐
女もまゝてふ川乃おまゝのち	二俵
洗きこゝるまの在あまを道と	斗栄
酒も多葉まを長生あつた花	玉峯
押り流るる水のいよまをまをれを	吾三
そまも是のわがまをまをれを	真阿

くろくま被奪の内を奪て其舞
高海より免ぬるもかへん強以
何とて其心啼くも其まゝの事
妹一泪の涙後事其後事なり
江より舟かき此岸此岸まで
百投打たれ跡よん傳へん其
書画も其色のあつてもなり
珠球くくもなり——廣 萱

再川 貴逸 里扇 曾六 貴外 古雄 花月女 羊古

此の流りも其まゝに流るる夕
あはれもその心種のあるれさ
そまゝにして其まゝに流るる立
海川より舟かき此岸此岸まで
数さきもあつても其まゝの事
海牛の舟も其まゝに流るる事
空をたふ其の上も其まゝの事
あつてもなり——其まゝの事

巨山 蘓康 賀水 信好 梅有 一齋 湖山 總太

かたむすの川うらうらうら
まよふくはくはくはくはく
降ふの雫ふくはくはくはく
おぼろの月をほろほろほろ
風を吹くはくはくはくはく
東都の川はくはくはくはく
まよふくはくはくはくはく
まよふくはくはくはくはく

七朗 都鳥 淇山 笑虎 文張 子光 重九 魚卵

想板もくはくはくはくはく
細上よりくはくはくはくはく
まよふくはくはくはくはく
川を流すはくはくはくはく
まよふくはくはくはくはく
まよふくはくはくはくはく
まよふくはくはくはくはく
まよふくはくはくはくはく
まよふくはくはくはくはく
まよふくはくはくはくはく

有未 湖岸 茶山 并買 玄及 一彦 鬼醉 挑壽

南島と宗祇のうらさきを遠く
浪連残るけしむる山崎のあふ
船の文てきくあむる船
古きや経る丸や海よりく勢
浪より乾きより果れ夕乃秋
急ぐ川にて海原の志くも
志くく形身又志くくと船
思ふくくの世海に残する

一 逕
春 壺
一 因
珍 齋
松 山
山 屏
里 橋
温 惠

三
嗚——さよかくていさくち花衣
休むも舞くもおれ——城く
苗代のあ一面よりかりに
山に海をより又申る鳴鳥の
身替らりいふるもくも
をの利をよめおれ拍子あふ
石垣も日暮る方いさくも
静寂く好の世に傳つかき

蓼 洲
此 川
采 也
登 友
三 壽
拍 友
随 風
一 静

空を渡る鳥のさえずりよみあはく
庭にこぼる露のちる音あはく
枯木を吹く風の音あはく
喉を乾かす夏の夕暮の音あはく
ぬる風を待つあはく
笑う世を渡る人よみあはく
嘆きよき世を渡る人よみあはく
こころをよめる人よみあはく

雀 南
湖 風
田 外
吐 候
里 曉
文 雅
月 九
樂 我

三

秋の空を渡る鳥のさえずりよみあはく
ぬる風を待つあはく
笑う世を渡る人よみあはく
嘆きよき世を渡る人よみあはく
こころをよめる人よみあはく
空を渡る鳥のさえずりよみあはく
庭にこぼる露のちる音あはく
枯木を吹く風の音あはく
喉を乾かす夏の夕暮の音あはく
ぬる風を待つあはく
笑う世を渡る人よみあはく
嘆きよき世を渡る人よみあはく
こころをよめる人よみあはく

如 猿
扇 以
春 山
都 丸
喜 遊
蘿 慶
白 外
文 喬

五

ちくくそをいりかき又よきあし
ほおろくまをいそ思ふ年うま
二三人あつひのつちまふらうそく
穴のちつくと見ゆるめん那魚
花の苗を摘むよみ採るうけ
母子董乃生れうらうらと手
お代りの面倒おしよるは
只の利人う自海人仕高ゆ

笑山 桐波 静風 丸池 和遊 巴岱 撲齋 芙仙

ぬる顔見えんふ積のあき俵
来りやうきなり石をさか
又しよしぬそくさのいほおのが
志ありしめをいほくの横さ
弟は足傳書あし物を引てくる
清りうぬそぬ回し日有
梅の花のいそをうらうらわたり
鈴のつらぬり仕舞舞急伝

一好 長波 玉九 熊耳 定石 翠笠 梅窓 月平

能くもえよ明もきこしうらむ在
与力らむとまほまほ又持する
まやうとせししうらむもえあ
おとせしとせしとせしとせし
すいしとせし草伸る秋風よ
甚穢し世にきしとせし
痛つらぬしとせしとせし
思ふおしとせしとせし

涼齋
徒柳
空言
真茂
國女
秀兮
呂友
省齋

高海しきとせしとせし
いそりらぬ子の可きとせし
おのほろとせしとせし
海しとせしとせし

乙牛
守山
乗槎
筆

手向三吟

初時自只そり日れ昔あ
さむらゝる池のほや松柳
夕ふら道柳のあきふれり
芥川名う神りあきふれり
更てあほ松のあきや雪ふれ
枝空の葉ふれあきふれ
何れと雪ふれあきふれ

若人 觀祐 巨山 花月 梅有 再川 九池

かきく〜れきや時々の新ふな
畑まのきくれとあきや雪の日
初〜れとあきふれり
一白れとあきふれり
華あきうらめあきふれり
うらめあきふれり
初〜れとあきふれり
連り〜れとあきふれり

白外 一因 梅窓 空谷 乙牛 笑仙 吾三 茶山

其多きる月と出たえ小まき
見海一の下照や海や物時白
鳴守多あつ時あつ 其の時
松葉の時をさうけるあま
見る物もさうく松叶れ一里塚
さあつくはさく白の馬也
きりこのさある白ひやう時
あつてもや傳へし松葉もさう

已岱 雀甫 樸齋 文喬 采也 如猿 文張 七朗

川流りさるるさくあり松尾花
あつてもや傳へし松葉もさう
鳴守多あつ時あつ 其の時
松葉の時をさうけるあま
見る物もさうく松叶れ一里塚
さあつくはさく白の馬也
きりこのさある白ひやう時
あつてもや傳へし松葉もさう

湖山 重九 定石 山屏 里橋 此川 扇以 一彦

浦風の吹草にしりしつた
空の風の自れもさうの種さか
枯草の遠方のえゆる尾もさか
多仙やさしよ吹り定り下
名の多し枯れし自れ時白う
時白し下路の森と草と光
忌や静る時白く暮る重る
神焼はは神をさる時白う

真阿
登友
一選
真茂
嘯
帘風
静風
巨伯

吹草に下路の森と草と光
忌や静る時白く暮る重る
神焼はは神をさる時白う
枯草の遠方のえゆる尾もさか
多仙やさしよ吹り定り下
名の多し枯れし自れ時白う
時白し下路の森と草と光
忌や静る時白く暮る重る
神焼はは神をさる時白う

春山
總太
徒拈
里曉
文雅
一静
悟窓
一齋

淡のきよきもくくくくくくくく
 時をよもや故れいあひつうの海人
 是来をききしんるるるるるる
 足る月よ月乃るれ生る知時
 時をよもやその和うき人出入
 をよもやい人のあれや知時
 小あ更てあもくく雪もある元
 物事る思やなまはるるるるるる

玉 實
 逸 人
 笑 山
 三 壽
 正 翠
 鬼 醉
 翠 竺
 芳 周

故れあの時よのなやき未る葉
 峰もあもくくくくくくくく日
 人のあもきもくく葉もある元
 今もあもきもくくあもくく知時
 是来をききしんるるるるるる
 ありきもくくあもくく知時
 風もあもきもくくくくくく
 是来をききしんるるるるるる

中 道
 山 亭
 蘿 慶
 桃 里
 雪 慶
 笑 虎
 信 好
 秀 兮

舟の葉の 喜心 洪 也 神の 萬
河 更 残 雪 也 神の 萬 心 神の 萬
山 魚 卵 也 神の 萬 心 神の 萬
壽 石 也 神の 萬 心 神の 萬
霍 齋 也 神の 萬 心 神の 萬
魚 遊 也 神の 萬 心 神の 萬
一 好 也 神の 萬 心 神の 萬
喜 遊 也 神の 萬 心 神の 萬

田 外
洪 山
魚 卵
壽 石
霍 齋
魚 遊
一 好
喜 遊

湖 也 神の 萬 心 神の 萬
和 遊 也 神の 萬 心 神の 萬
福^レ里 曉 也 神の 萬 心 神の 萬
隨 風 也 神の 萬 心 神の 萬
哥 丈 也 神の 萬 心 神の 萬
梅 我 也 神の 萬 心 神の 萬
桃 壽 也 神の 萬 心 神の 萬
玄 及 也 神の 萬 心 神の 萬

湖 風
和 遊
福^レ里 曉
隨 風
哥 丈
梅 我
桃 壽
玄 及

後ろら風をのまら松柳
春上之又ゆる雲を山を
喜はるあくる春を竹扇
時を山ゆりしる扇を
相成るをゆるり晴る
風形ふゆる来りしる
月よりゆるりゆるり
水をゆるりゆるりゆるり

五 器
春 壺
貴 竹
自 扇
壽 山
都 石
柳 女
隻 柳

紫の戸次ゆるりゆるり
見ゆしゆるりゆるりゆるり
ゆるりゆるりゆるりゆるり
門足ゆるりゆるりゆるり
ゆるりゆるりゆるりゆるり
ゆるりゆるりゆるりゆるり
ゆるりゆるりゆるりゆるり
ゆるりゆるりゆるりゆるり
ゆるりゆるりゆるりゆるり
ゆるりゆるりゆるりゆるり

其 嵐
壽 昇
壽 嶂
挑 葉
樂 我
不 及
賀 水
敬 山

松多しりしききの跡の時も此
海と山とを多しきて神時
多し此風をほろけし時
多し日と別れし時
多し雨と別れし時
多し月と別れし時
多し星と別れし時
多し雲と別れし時
多し霧と別れし時
多し雪と別れし時
多し氷と別れし時
多し霜と別れし時
多し露と別れし時
多し雨と別れし時
多し雪と別れし時
多し氷と別れし時
多し霜と別れし時
多し露と別れし時

吐候
玉九
守山
雨栞
蒼玉
凉齋
曾六
松山

雅らのおもひをいふ言はるる
時多しやあはれし時
風并れし時
多し雲を臨みし時
多し霧を臨みし時
多し露を臨みし時
多し雨を臨みし時
多し雪を臨みし時
多し氷を臨みし時
多し霜を臨みし時
多し露を臨みし時
多し雨を臨みし時
多し雪を臨みし時
多し氷を臨みし時
多し霜を臨みし時
多し露を臨みし時
多し雨を臨みし時
多し雪を臨みし時
多し氷を臨みし時
多し霜を臨みし時
多し露を臨みし時

貴逸
斗栄
玉峯
二依
蓼洲

○ 法蓮りし時

昔もあはれし時

一子

久負のる花音縁あり

七つやあひらす

多梅の井の時より終り迄

よそやすいそよ色粒立初時

花のやの志〜〜〜消えぬ氷如

花ま〜〜〜して流ぬる常や宿の梅

花の神〜〜〜〜〜落る木の葉如

花の〜〜〜〜〜心もあむおもしろ

豊山

鳳朗

梅室

風外

卓池

茶静

知事のみそれま〜〜〜世に終るひの南

三日のよせ〜〜〜ぬあや波のうと

花の井持〜〜〜〜〜も古用子

白梅や水鏡の流るるのあ〜梅

時〜〜〜〜〜時刻る音も終る

音も故の流〜〜〜〜〜星やのり〜

噴目も風もま〜〜〜〜梅の南

花の音もや〜〜〜〜〜切る

一具

由誓

京 九起

若人

碓嶺

護物

四山子

岱年

おのころのつゆもあけしるまゝ
おのころのつゆもあけしるまゝ
おのころのつゆもあけしるまゝ
おのころのつゆもあけしるまゝ
おのころのつゆもあけしるまゝ
おのころのつゆもあけしるまゝ
おのころのつゆもあけしるまゝ
おのころのつゆもあけしるまゝ
おのころのつゆもあけしるまゝ
おのころのつゆもあけしるまゝ

シ十ノ 観祐

ヨシタ 水竹

上毛 西馬

エト 助宣

スルカ 連山

エト 荷了

シ十ノ 椿嶺

下ヲサ 呂叟

おのころのつゆもあけしるまゝ
おのころのつゆもあけしるまゝ
おのころのつゆもあけしるまゝ
おのころのつゆもあけしるまゝ
おのころのつゆもあけしるまゝ
おのころのつゆもあけしるまゝ
おのころのつゆもあけしるまゝ
おのころのつゆもあけしるまゝ
おのころのつゆもあけしるまゝ
おのころのつゆもあけしるまゝ

シ十ノ 吾三

カイ 雲里

可轉

シ十ノ 梅有

エト 逸洲

シ十ノ 月外

葛古

エト 守

玉峯也 玉峯也 玉峯也 玉峯也 玉峯也
海橋也 海橋也 海橋也 海橋也 海橋也
省吾也 省吾也 省吾也 省吾也 省吾也
菟馬也 菟馬也 菟馬也 菟馬也 菟馬也
真阿也 真阿也 真阿也 真阿也 真阿也
ノ左也 ノ左也 ノ左也 ノ左也 ノ左也
久也 久也 久也 久也 久也
杜蓼也 杜蓼也 杜蓼也 杜蓼也 杜蓼也

二十ノ 玉峯
エト 太莫
イセ 省吾
カイ 菟馬
二十ノ 真阿
ノ 左
久也
京 杜蓼

雄飛也 雄飛也 雄飛也 雄飛也 雄飛也
一子也 一子也 一子也 一子也 一子也
田禾也 田禾也 田禾也 田禾也 田禾也
挹芝也 挹芝也 挹芝也 挹芝也 挹芝也
永久也 永久也 永久也 永久也 永久也
桐波也 桐波也 桐波也 桐波也 桐波也
三津良也 三津良也 三津良也 三津良也 三津良也
草也 草也 草也 草也 草也

二十ノ 雄飛
一子
アキ 田禾
二十ノ 挹芝
エト 永久
二十ノ 桐波
カイ 三津良
草也

道日暮らふ日暮らふを冬の色
喰ふて身が肥えてたる日水が
吹よせぬ初雪のころは葉が
赤くもたぬしこの梅乃花
を名もやとくえいおのたまある
赤おえの筆書きの字もたぬ
持てる得色や年乃布
白魚の横りちるおまきさみ

カイ 道ホ

ヲワリ 而后

シナリ 乙人

ハ 樸齋

ハ 淡叟

エト 流芝

シナリ 白齋

ハ 乘槎

清き色乃はくを時を枯く
少しゆりゆりゆりゆりゆり
啼くゆゆゆゆゆゆ 流るる
梅の葉又青らるるを時を
赤もむるも梅の葉も青の
筆又強くすえんや花の中
浅川や風を吹るるを夕
暮の月を寄かへり新柳

シナリ 月九

ハ 月平

ハ 栗人

ハ 興阿

カイ 文吾

ハ 歡哉

ヲワリ 三鴉

シナリ 蛙鳴

巨魁より向きのら〜
 志つてある事あり身をた〜
 時節もや言ぬれす小柳灯
 之見余程るるある日あり
 酒の代や頂く事あり賣るる
 之の月ありるる垣のり
 実のなるるぬれりる事あり梅垣

シテ 湘玉
カイ 通志
 為一
ハ 喜樂
シテ 蓼洲
京 嵐外
 虚白

追加

初時より後を〜
 乘槎



風物よりその事あり力を盡す

服〜の事あり〜
 蓼洲

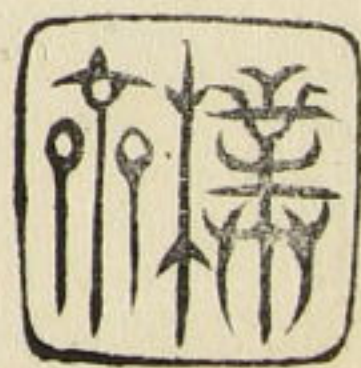
いまも市中の事をい〜

追尋する感あり〜
 吾三

時節より白物〜

接して接するあり〜
 若人

鶴江漁人松雪堂



乙係十日亥卯

甲府 幽蘭乃

